愉快な魔術師たち

knight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愉快な魔術師たち

【Ｎコード】
Ｎ２５５９Ｚ

【作者名】
ｋｎｉｇｈｔ

【あらすじ】
交通事故で死んだ少年…姫小路　春臣
しかし目の前の天使によるとそれは手違いだった。
これは、異世界の公爵家に転生した少年の物語。＋　＋　＋　＋
＋　＋処女作ですどうか暖かい目で見守ってください。

エピローグ

――あぁ、僕死んじゃうのかな。――

姫小路（ひめのこうじ）　春臣（はるおみ）は、死を覚悟していた。だってトラックがもうすぐそこまで来ているのだから。

でも後悔はしていない！

これであの少女は、助かったのだから。

「頑張ったんだから来世は、もっと長生きさせてね。カミサマ…」

次の瞬間、凄い衝撃を受けて春臣の意識は、闇に消えた。

＜　　＜　　＜　　＜　　＜

「はじめまして。私が今回あなたを担当する天使のイカレ帽子屋（マッドハッター）です。以後、お見知りおきを。」

イカレ帽子屋（マッドハッター）と名乗った天使は、ニコヤかに握手を求めて手を出した。

「あぁ、どうも…」

春臣は、反射的に手を出して、握手に応じた。

ここは、どこだ？

辺りを見渡してみると真っ白い空間がずっと先まで続いている。噂

に聞く天国と言うところだろうか？

「君は、姫小路　春臣君。享年１５才の日本人ってこで間違いないかな？」

「えぇ、はい、そうです。」

天使は、メモ帳に目を落としながら確認してくる。

「あのぉ、僕も一つ確認してもいいですか？」

「はい、いいですよ。なんでしょう？」

「ここは、天国ですか？」

「まぁ、人は皆さんそうよんでいますね。」

やはり天国だったのか。

と、言うことはあの時ぼくは、死んだのか…

「はい、そのとおりあなたは、先程天に召されました。」

心を読まれた！？

「あとその事について我々は、あなたに謝らなくてはいけません。」

「謝る？」

天使は、先程までのニコヤかな表情とは違いバツの悪そうな顔をしている。

「はい、実はあなたは、こちらの手違いで死んでしまったのです…」

「どうゆうこと？」

「今日死ぬ予定だったのは、あなたが助けたあの少女だったのですが…手違いであなたが死んでしまったのです。」

「そんなぁ」

確かに少女を助けたのは、僕の意識だったけど、それが「手違いでした」なんて悲しすぎる。

「しかし！そんなに落ち込まなくても大丈夫ですよ。」

落ち込んでいる春臣に天使が明るい声で話しかける。

「我らが主は、あなたの行いをちゃんと見ていました。あなたが少女を助けて死んだことや、こちらに非があったことをかんがみて、なんと！あなたは、輪廻転生の輪に入ることなく直ぐに転生出来ることになりました。」

パチパチパチパチと拍手しながら、まるで春臣が何かに当選したかのようにつげた。

「更に、主のご厚意で春臣君には、かなり自由な選択肢があたえられます。よかったですね。」

「自由な選択肢？」

「具体的には、生まれや容姿あとは特技や才能などですかね。」

「マジで？」

思わず目を輝かせる春臣を見て天使は、思わず微笑む
「マジもマジ大マジですよー。まぁ、とりあえず希望を言ってみてください。
ダメなものは、無理と言いますんで。」

「それじゃまず、家族は両親がそろってて結構長生きしてくれると嬉しい。あ、もちろん僕も長生きしたいです。あと兄弟もほしいかな。」

「えぇっと、ちょっと待ってくださいね。」

天使は、持ってるメモ帳にさらさらと書き込んでいく
「はい、良いですよ。家族欄はオッケーです。他には？」

「あとはまぁ、容姿は不細工にならない程度でお任せでお願いします。家も同じように貧乏にならない程度でおまかせで。」

「あれ？そんなんで良んですか？もっと凄いこと要求しといた方が良いじゃないですか？」

要求ってそんな誘拐犯みたいな言い方だなぁ。

「良いんですよ。それぐらいで、あと特技とか才能ってたとえばどんなのですか？」

僕の問いに少し考えてから天使が答える。

「まぁ、天才的な頭脳や運動神経あとは、美術など芸術の才能なん

かですかね。あぁ、異世界を選択されるのでしたら剣や魔法なんかも…」

「魔法！？」

そうゆって天使の言葉を遮る。なにを隠そう、僕は魔法とゆうものにずっと憧れているのだ。厨二病じゃない中学生なら普通の反応だ。

「それ！！魔法使いになりたいです」

僕は、天使の肩に手をおいておもいっきり身体を揺すった。

「分かりました。分かりました。でも魔法は、向こうの世界では、誰でも使えるモノなので「魔法を使えるようにする」は、特技になりません。」

「あれ？そうなの？」

僕は、天使の肩から手を離しながら問い掛けた。

「えぇそうです。凄い魔法使いになりたいと言うのでしたら。魔力魔法、精霊魔法、降霊術、これらすべてを使えるようにすることも出来ますよ。」

「じゃあ、それでお願いします。」

「わかりました。」

天使は、メモ帳に「魔法系全体の才能」と書き足した。

「はい、これで一様すべての欄がうまりました。

あなたの転生さきは、剣と魔法の世界＞クロテスメイア＜です。じゃあ早速、転生しましょう。」

天使が、バチンと指を鳴らすと、何も無い空間から首吊り用の縄が垂れ下がった。

「これに、首を吊っていただけばあとは、自動的に転生さきの世界にお送りいたします。」

「わかりました」

僕は、少し緊張と首を吊ることえの恐怖が入り交じった不思議な気持ちを抱きたがら首を吊った。

想像してたのと違うな、もっとと苦しいと思っていたのに。

「あ、そうそうあちらの世界は、主と聖霊の加護を強く受けている世界なので天使である私とも会うことがあるかも知れませんね。」

「本当に！？どこに行けば会えるの？」

この天使にはできればまた会いたいな～

「不思議の国ですよ。あなたの生活が落ち着いたら使いを出します。まぁ、来れればいつ来てもいいですよ。どおせいつもお茶会をしてますからね。」

「じゃあそろそろ逝きますか？」

「うん、お願い。」

「では、第二の人生楽しんで下さいね。」

その言葉を最後に春臣の意識は再び闇に消えた。

「逝きましたか…」

一人になったイカレ帽子屋（マッドハッター）は、春臣が消えた場所を見つめていた。

「次に会うときが楽しみですね。」

私は、懐から銀時計を出して時間を確認した。

「おっと、もうこんな時間ですか。早くしないとお茶会に遅れてしまう」

銀時計を懐にしまい光の中に歩きだした。

「また会おう。少年…」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2559z/

愉快な魔術師たち

2011年12月9日00時50分発行